



あだし野の露消ゆる時なく
鳥部山の煙立ち去らでのみ
住み果つる習ひならば
いかにもものあはれもなからん
世はさだめなきこそ いみじけれ
命あるものを見るに
人ばかり久しきはなし

かげろふの夕べを待ち
夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし
つくづくと一年を暮らすほどだにも
こよのうのどけしや

あかず 惜しと思はば
千年を過ぐすとも
一夜の夢の心地こそせめ

住み果てぬ世に
みにくき姿を待ち果て何かはせん
命長ければ辱多し

長くとも四十に足らぬほどにて
死なんこそ めやすかるべけれ
そのほど過ぎぬれば
かたちを恥づる心もなく
人に出でまじはらんことを思ひ
夕べの陽に子孫を愛して
さかゆく末を見んまでの命をあらまし
ひたすら世をむさぼる心のみ深く
ものあわれも知らずなりゆくなん
あさましき